

1 高大接続・大学入学者選抜を巡る現状と課題

- 大学進学者の多様化
 - ・大学・短期大学への進学率:38%(S50) → 55%(H25)
 - ・知識基盤社会の進展に伴う、高等教育を受ける必要性の高まり
- 大学入学者選抜の選抜機能の低下
 - ・大学入学志願者に対する入学者の割合(収容力):73%(S50)→92%(H25)
- 高校生・大学生の学習時間の減少や学習意欲の低下
- AO入試等の一部における不十分な学力把握
- 選抜性の高い大学における1点刻みによる学力検査への偏重
- 大学入試センター試験の肥大化と実施体制の限界
 - ・多数の出題教科・科目、50万人を超える大学入学志願者が同時受験

2 高大接続・大学入学者選抜の改善についての基本的な考え方

- 高等学校から大学までを通じて、「生涯学び続け、主体的に考える力」等、これからの時代に必要とされる力を育むためには、知識・技能とともに、知識・技能を活用する力を育成することが必要
- このため、高等学校教育、大学教育とその接点である大学入学者選抜との一体的な改革が必要
 - ・高等学校教育の質の確保・向上
 - ・大学教育の質的転換
 - ・能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価する大学入学者選抜への転換

3 高等学校教育の質の確保・向上

- 学校から社会・職業への円滑な移行促進
 - ・生涯にわたって学び続けるための基盤となる力を身につけるとともにどのような職業においても共通に求められる汎用的能力の基礎となる力等の獲得
 - ・体験的な学習活動を効果的に活用したキャリア教育の推進
- 多様な生徒の学習形態や進路希望に対応した教育活動の推進
 - ・学び直しが必要な生徒や、優れた才能や個性を有する生徒への対応
- 幅広い資質・能力の多面的な評価
 - ・新たな評価手法の開発・普及、指導要録の見直し
 - ・育成すべき資質・能力を一層重視した高等学校の教育課程の見直し
- 達成度テスト(基礎レベル)(仮称)の在り方(別添☆)

4 大学の人材育成機能の強化

- 大学教育の質的転換
 - ・各大学の取組を促進するための国の重点的支援や大学評価の改善
- 大学入学後の進路変更の柔軟化
 - ・募集単位の大くり化と入学後の学修支援・進路相談体制の充実
 - ・学部・学科を超えた履修機会の拡大(副専攻制度等)
 - ・編入学等の推進
- 厳格な成績評価の推進
 - ・GPA等の成績評価・管理システムの進級判定や卒業認定等への活用

5 大学入学者選抜の改善

- 多面的・総合的に評価する大学入学者選抜への転換
 - ・多面的・総合的な評価のための新たな枠組み(達成度テスト(発展レベル)(仮称)の創設)
 - ・各大学におけるアドミッション・ポリシーの明確化、国による策定事例集やガイドラインの作成
 - ・大学入学志願者に関する多面的な情報の提供、収集(調査書の活用・様式の見直し等)
 - ・様々な学習成果等を評価する枠組みの整備(資格・検定試験や課題探究型学習の成果物の活用等)
 - ・多様な能力等を評価・判定するための手法の開発・普及(言語運用力、数理分析力等を測る問題の研究開発等)
- 推薦・AO入試の改善
 - ・大学入学志願者に求められる基礎的・基本的な知識・技能及びこれらを活用する力の把握や合格発表期日に関するルールの方策
- 各大学の取組を促進するための方策
 - ・各大学における入学者選抜実施体制の整備
 - ・各大学の改革の取組に対する国の重点的支援等

6 達成度テスト(発展レベル)(仮称)

- 達成度テスト(発展レベル)(仮称)の在り方(別添☆)

7 高等学校教育と大学教育の連携強化

- 大学の積極的な情報提供
- 大学レベルの教育に触れる機会等の充実
- 大学入学前の準備教育等の充実

「達成度テスト(基礎レベル)(仮称)」

◆目的・活用

- 高校教育の質の確保・向上に向け、生徒が自らの高校教育における基礎的な学習の達成度の把握及び自らの学力を証明することができるようにし、それらを通じて生徒の学習意欲の喚起、学習の改善を図る

〈上記以外の活用方策〉

- 学習改善を図るためにテスト結果を高等学校での指導改善にも生かすこと
- 推薦・AO入試や就職時に基礎学力の証明や把握の方法の一つとして、その結果を大学等が用いることも可能とすること

◆対象者

- 高校生の個人単位での受検又は学校単位での受検(希望参加型)
※できるだけ多くの生徒が参加することを可能とするための方策を検討

◆内 容

- 国語、数学、外国語、地理歴史、公民、理科を想定(選択も可能)
- 高等学校段階で共通に求められる基礎的・基本的な知識・技能を測る。知識・技能を活用する力を測る問題も含める。※複数の教科を融合した問題を含めることも検討
- 各学校・生徒に対し、成績を段階で表示(各問題の正誤や正答率等も表示)

◆形 態

- 多肢選択方式を原則としつつ、一部記述式も検討

◆実施方法

- 在学中に複数回(例えば年間2回程度)受検機会を提供、高校2・3年での受検を検討(※高校1年からの受検も可能とするか検討)
- 年間の実施時期は、夏から秋までを基本として学校現場の意見等を聴取しながら検討
- 実施場所は、高校(学校単位)又は都道府県ごと(個人単位)に会場を設ける方向で検討

◆その他

- 「高等学校卒業程度認定試験」と統合する方向も含めて検討。
※その際、両制度の趣旨を踏まえたテスト問題の在り方等、多様な観点から検討

「達成度テスト(発展レベル)(仮称)」

◆趣旨・目的

- 大学及び大学入学者志願者が、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握することを主たる目的とし、大学入学志願者に求められる基礎的・基本的な知識・技能及びこれらを活用する力の測定を重視する

◆対象者

- 大学入学志願者を主たる対象とするが、大学で学ぶ力を自ら確認したい者(大学在学者や社会人等)の受験も可能とする

◆内 容

- 大学入学志願者に求められる基礎的・基本的な知識・技能及びこれらを活用する力を測る
- 知識・技能を活用する力を測定・評価するため、「合教科・科目型」や「総合型」の導入を目指し、専門家等による検討を行う
- 導入当初は、「合教科・科目型」や「総合型」の問題を「教科型」に加えて実施することが適当。その後、実施状況や次期学習指導要領の改訂の動向も踏まえつつ、「合教科・科目型」や「総合型」の部分の拡大を検討

◆出題・回答方式

- 記述式問題の出題については、CBT方式の導入に関する研究開発と合わせて検討。当面は、多肢選択方式により知識・技能を活用する力を測定する出題を充実

◆実施回数・時期

- 年複数回の実施については、当面、出題教科・科目の見直し等により1回の試験を1日で終えることを前提に、年2回の実施とすることが適当
- 実施時期については、高校教育への影響を考慮しつつ、高等学校関係者、大学関係者等を含めて協議を行う

◆成績表示の在り方と活用方法

- 「知識偏重の1点刻みの選抜」にならない利用が促進されるよう、素点による成績表示・提供は行わず、段階別表示のほか、標準化点数、百分位等により成績を提供

◆導入に向けた今後の取組等

- ①「合教科・科目型」や「総合型」の問題の具体的な枠組み、②記述式問題の導入、③CBT方式の導入、④成績表示の具体的な在り方については、専門家等による検討を行い、今後1年を目途に結論を得る
- 具体的な実施方法の検討を行うに際しては、「達成度テスト(基礎レベル)(仮称)」の在り方と一体的な検討を行う
- 可能なものから実施し、検討・準備や周知に必要な期間を考慮すると、早ければ平成33年度大学入学者選抜からの段階的实施を目指す